

はい

戦争のない21世紀のために語り継ぎます

第23集 '01平和学習資料

私の戦争体験



いずみ

2001年7月

あまりに苛酷な光景

貝塚市 川村 鈴子

昭和二十年五月。その日のお昼すぎ、けたたましいサイレンが鳴り響きました。空襲警報発令のサイレンです。いつもは警戒警報発令後しばらくして空襲警報発令という順序で、何事もなく解除で終わっていたのです。

サイレンと共に少し遠くで爆音も聞こえてきました。窓から空を見上げると何十機という編隊です。私も家族も防空壕に入る間もなく裏の大きな夏みかんの樹の根元に身をひそめました。さいわいにも樹の枝ぶりは直径七呎もあり、私たちをすっぽり隠してくれました。

しばらくして爆音が聞こえなくなりました。その時誰かが走りながら「倉紡に爆弾が落ちたぞ」と繰り返しながら遠ざかって行きました。私の家から一キロくらい離れた場所に倉敷紡績が軍需工場として兵器を生産していました。当時私の姉は高等科二年で学徒動員として倉紡へ通っていました。その倉紡に爆弾が落ちたことを知った母は夏みかんの樹の下からとび出して行きました。思わず私も母の後を追ったのです。堤防をひた走りに行くと、大きな松の樹が半分に裂け、地面は爆弾の破片でいっぱいでした。私は、わらじを履いていたので、足の裏に破片が刺さって思うように歩けません。それでも母に追いつこうと一生懸命歩いて

行きました。しばらく行くと母が立ち止まっています。何かと思つてのぞいて見ると担架に横たわっていたのは、私の家の隣の和子さんでした。お腹が割れて真っ赤になっていました。母が、私に戻って和子さんの家に知らせるように言うと、また走り去って行きました。私は来た道を戻り隣の家に知らせると、また母の後を追いました。

元の場所へ行くと大人の人がたくさんいて何かを探していました。一人の人が「見つかったぞ」と叫びました。見ると片足でした。担架に寝かされた女の子は顔も原型をとどめず、体には無数の破片が突き刺さっていました。当時小学五年生の私にとっては余りにも苛酷な光景でした。そしてその場所から足が動けなくなっていました。姉の安否を確かめた母が戻ってきました。私の顔を見ると母は泣きました。母の背中に背負われて家に帰りました。しばらくのあいだ食事のどを通らない日々でした。隣の和子さんの葬儀も時節柄またいつ空襲警報が出るかも知れないとのことで内々に済まされました。

今は慰霊碑に名前を刻まれています。何の意味があるのでしょうか。戦争は人を殺します。戦争を憎み平和を願い、みんなが幸福に暮らしていける世の中になりたいものです。

紡績工場の寮母の時に

堺市 上谷 智恵子

家にいる若い者には、いつ徴用令が来るかわからない昭和十九年、私は二十四歳でした。この年に大阪府認定の寮母試験があり、合格して研修を受けました。

この時に、いままでの教育はもとより、なおいっそう国のため、人のためになるように教えられ、疑うこともなく、なんといふことをするのかと感激・信頼し

教科書を通してその時代、時代をふり返ってみましょう。

戦争と教科書

1892年(明治25)
尋常小学修身書

1886年(明治19)から「諸学校ヲ維持スル畢竟国家ノタメナリ」(森有礼文部大臣)として教科書の国家統制が始まる。小学校では体操が必修となり、男子には隊列運動が課せられる。

て、五月に尼崎市内に立ち並ぶ工場群の中の紡績工場の一つの新米寮母になりました。

古参の寮母から、寮母の役目、内容、しきたりなどをこまごまと教えられ、一つの寮に生活する百人以上の寮生を担当させられます。寮生たちは「女工」と呼ばれ、地方からの挺身隊や徴用令で集められた、下は十二〜三から上は二十五〜六歳の人たちです。一部屋十畳から十五畳のところに十名は入室し、寮母の室は寝室、事務所二室を独占していました。プライバシーなどもなく、二十四時間三交代で日々生活を管理されます。仕事や空腹、人間関係などでつらくなり、帰りたくなった寮生が逃げだすと、寮母が追いかけて連れもどすこともありました。

また、ある日、寮生が出勤した後を古参寮母が見回り、熱を出して寝ている寮生を詰問し「欠席届を見たが、出勤できるかどうか判断をしに来た」と言い、彼女に手を当て「これぐらいなら大丈夫、仕事に行きなさい」と言います。彼女は熱でフラフラなのに出勤させられました。私はこの時に「なんと人の心は冷たくなったのか」と大きなショックを受けました。

その後も寮生たちに手紙などが来ると、本人にはわからないように蒸気で開封し、内容を読み、誰がどんなことを親元に書いたか、要注意かどうか検閲しま

す。寮生に面会の時でも守衛室の一室で盗聴します。学徒動員で来た子たちが「学校に行き勉強がしたい」と言うのをよく聞きました。これを聞くとかわいそうにもなり、国に対して腹が立ちました。そのなかでも、視察官が来る時です。事前に連絡があり、寮生たちは前日に掃除、お茶やご馳走の接待をし、手土産を持ち帰るのには、感心も得心もしてしまい、「視察官とは泥棒かいな」と思いました。このころから考えが変わりはじめました。工場が爆撃され、集団移動した貝塚工場で終戦になりましたが、多くの方が同じように思ったのではないのでしょうか。「おかしい戦争だった」「ひどい教育だったなあ」と。

その後、愛知県犬山市で紡績会社の寮母となり、若い寮生たちが簡単なことができないでいるのに気付く、会社の福利厚生施設の青年学校で裁縫と家事を教え、ここで出会った寮生たちと今も交流が続いています。

皆さん、教えられたこと(教育)は、いつまでも残ります。だから「なんでこんなことに」とならないように、もっと世の中に関心を持つてほしいと願います。戦争は何もかも根こそぎに破壊します。人々が幸せになる本当の平和、民主主義の世の中に。

(聞き書き)

空襲の日夜をナースとして

藤井寺市 秋津川 よし子

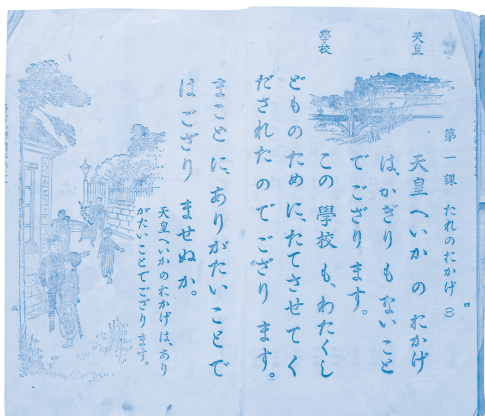
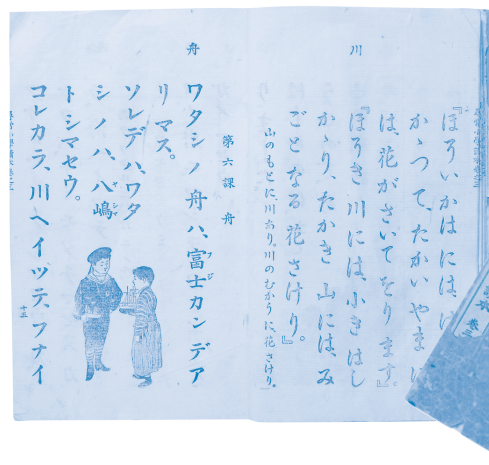
五十数年前の記憶をたどり、思い出すがままに綴ってみました。

昭和十八年、戦争も中盤から終盤を迎えたある日、ふと手にした新聞記事に釘づけになりました。それもそのはず、ふだんから憧れていた白衣の天使の夢がかなうかもしれない一瞬。大きな見出しで、日本医療団看護学生募集。さっそく応募、試験を受け、大分市内の看護婦学校に入学しました。全寮制で二年間、学習

と実習に明け暮れる毎日。その間にも警戒警報や空襲警報のサイレンは日常茶飯事。しばらくするとB29の金属音すら、さいさん耳にするようになりました。

授業中でも空襲警報になればただちに、授業は中断され、各自は大分市内の実習病院へ直行の繰り返し。その時の服装は、モンペ姿に防空頭巾。非常食「炒豆・焼き米」などは実家より送ってきた物を袋に入れ、必ず肩にかけて持ち歩きました。このように慌し

1899年(明治32) 尋常小学読本 卷三



10年前の1899年(明治32)、天皇を「神聖ニシテ侵スベカラズ」とした大日本帝国憲法が發布され、その翌年には「天皇ニ忠節ヲ誓フ」臣民道徳をうたう「教育勅語」も發布された。

い中にも新人生を迎えるため県庁の近くの宿舎から少し離れた学校のそばへ引っ越しました。

二年生も終りに近いある日、朝からサイレンが頻繁に鳴り、いつもと様子が違うので、寮生たちと手分けしておにぎりをつくっていた最中に、空襲警報のサイレンと同時に地響とともに爆音。気がついた時には宿舎裏の防空壕の中にいました。つかのまの出来事に無我夢中とはこのようなことかもしれない。大分市内の軍需工場が爆撃されたらしく、前方の空が赤く染まっていた。

色んなことがありながらも二十年二月、無事卒業と同時に看護婦免許もいただくことができました。任地は日豊本線大在駅で下車した場所、昔の国立療養所で白衣の生活が始まります。一年間の義務として勤務する病院は、コの字型の平屋建て、病棟の奥の宿舎裏に松林。それをぬけると、砂浜、海と続く申し分のない景色。でも戦争は日増しに激しさを加え、病院の空地にも職員でさつま芋を植えたり、芋の茎は食用にしました。

二十年七月頃だったか、突然の空襲警報で宿舎裏の

松林の中の防空壕にとびこむ。B29の金属音があまりにも近くに聞えるので少し顔をあげて松林越しに前方を見ると、線路に添ってB29からの機銃掃射。まるで大粒の雨のように見え、その場に棒立になる。大分市内もかなりの被害を受けた模様。あとで耳にした話では学校も宿舎も焼かれたとのこと。すさまじい光景が目につかふ思いがしました。

八月十五日の玉音放送で終戦を告げられた瞬間、全身の力がぬける思いと同時に涙がこみあげてきたことは昨日のように覚えています。色んな流言飛語のとびかう中、不安な日々。生まれ故郷の耶馬溪の土を踏むことはおそらく出来ないのではと半分はあきらめながらも、ナースとしての生活は続きます。

幾多の体験を乗り越え、二十一年三月、めでたく我が家の敷居をまたぐことが出来た時は本当に感無量でした。

苦しい時は常に「欲しがりません勝つまでは」と自分を励まし今日まで生きてきました。でも、やはり平和が一番。世界の平和を期待しております。

どんなことがあっても……

堺市 曾根 良胤

昭和十七年一月、信太山野砲第四連隊入隊。四月に旧満州東安省林口にあった山砲隊（八七一部隊）に移る。十月、経理部幹部候補生となり、昭和十八年八月、主計下士官として新京（今の長春）の第二航空固定通信隊就任、昭和二十年七月、関東軍司令部材料廠（新設部隊）に転属、八月十四日、部隊が通化（朝鮮に近い町）に移動のため新京駅より汽車に乗ることになり、駅まで行った（通信隊にいたので広島に特殊爆弾が落とされ、海軍が全滅状態で日本の敗戦も近いのではないかと思っていた）。

列車がいつ動くかわからないので、駅近くで行きつ

けの呑み屋（うな新）で樽酒を呑みながら待っていた。その店も男の人は終戦まぎわに軍人に召集され、女手だけでやっていた。列車に戻ったが動いたのは翌朝だった。乗っていたのは私たちの部隊の他は軍属と軍人の家族ばかりだ。列車は途中で止まって動かないので、野戦釜をおろして食事を作った。私は兵隊一名をつれて野菜を買いに行った。やっと列車が動き出したが、吉林（新京から東へ約百キロ）へ着いたのは夜の十時頃になった。駅の部隊で食料補給のはずだったが、もらえなかった。「日本が負けた」の情報が入っていたのだ。ともかく通化へ。終戦だから日本へ帰れ

戦争と教科書

1899年（明治32）
尋常小学国語読本



1880年代あたりは軍隊についての表現も「兵隊あそび」などだったが、この頃になると、子どもが旭日旗（軍旗）とラッパを持っている絵や、直接「軍人」の項が出てくる。1904年から日露戦争。

ると思っていたが「新京に帰れ」という命令が出され、軍人だけになり、再び列車に乗り新京へ向かったが、四平街（新市の南百キ余リ）の停車場に止まってしまった。武装解除で兵器は全部取り上げられた。終戦後は私たちの持っていたお金（満州銀行券）は使えなくなっていたので、ミルク缶を兵隊に持ってもらうて野菜などと交換するため市場へ行った。余りうまくいかなかったが、治安も悪いようなので列車に戻った。駅には列車が数本停車していて、運転手や駅員の姿がなく、隣の列車にはハルピンや牡丹江などから逃げて来た日本人が中国人にまじって多数乗っていた。男性は召集されたのか少なく、女性と子どもが多かった。兵隊たちもそれを見て相談に来たので、ミルク缶を一箱わけてあげることにした。逃げて来た人たちは、お金は通用しないし、持物にも限りがあり、いつ動くかわからない列車に乗っていたので、どうなることかと細かい思いをしていたことだろうと思った。今でも残留孤児のことがテレビに写ると、この悲惨な状況を思い出し胸がしめつけられるようです。

私たちの列車は、列車運転経験のある兵隊の運転で動き出し、新京（公主嶺）に到着。下車して積荷をおろそうとしていると中国の兵隊たちに銃をつきつけられ、そのまま部隊へ帰された。途中で武装したソ連兵の車に遭ったが、無事だった。

九月十日、ソ連軍の命令により新京駅より列車に乗ることになった。日本へ帰れると思ったが、列車は北に向かい、黒龍江（アムール河）まで来た。凍りついた黒龍江を歩いて渡り、シベリア鉄道に乗ったが、西へ向かって走った。バイカル湖のほとりを昼も夜も走って、やっとイルクーツクに着いた。下車して若い女性に散髪してもらった。冷たいのにみんな裸足だ。戦争が勝利に終わっても一般の人たちはまだ靴もはけないでいるのか。それでも皆陽気で、夜になるとどこからか女性たちのコーラスが聞こえ、そのハーモニーの美しさに感動した。列車はノボシビルスクより南下し、ウズベック共和国のヒルコーバという所に着き、収容所に入った。主にダム建設の仕事についた。その後私はタシケントのレンガ工場、近郊のホルホズや鉄道建設、最後は炭坑町カルカンダーの機械工場で働いた。

その間、「どんなことがあっても決して無理をしないで健康で日本に帰ること」を目標に頑張り続け、昭和二十四年十一月、舞鶴に上陸、日本へ帰ってきた。

戦火の中で暮らした者として

堺市 海老原 静江

連日、連夜、敵機来襲の警報におびやかされていた敗戦直前の夏、一夜でもいいからぐっすり眠りたい、というのが切実な願いであったことを覚えている。綿の入った防空ズキンをかぶり、住所・氏名・血液型を記した名刺大の白布を胸にぬいつけた上着を着用、夜眠るときも、着のみのまま、ぐっすり眠ることはなかった。

上空から落ちてくる「ショウイダン」は、まるで花火のように空中に散らばり、そのどれもがみんな自分の頭上に落ちてくるように思えて、夜空の下を逃げま

どった。それが毎夜のこと、狭い防空壕の中で、頭をかかえ、うつぶせにうずくまって敵機の去るのを待つより方法はなかった。近くに爆弾が落ちると、両手で耳をおさえ、かかえた頭が低い防空壕の天井につき当たるほど身体がとび上り、低い壕の天井につき当たるほど振動したのが、今も私の身体のどこかに残っているように思える。

警報解除のサイレンが響きわたると、やっと蘇生の思いで防空壕からはい出して家族どうしが手を取りあい、ホッとして気がぬけたような精神状態になったの

1918年（大正7）
尋常小学修身書
児童用



よく使われた「キクチコヘイ」の英雄談。1918年、日本は他の諸国とともにシベリア出兵。

を、今でも身体のだこかが覚えている。警報解除のサイレンが鳴りわたると、私たちはホッと、防空壕からはい出した。思い出したくもない、本当にいやな思い出である。

戦争を仕かける方も、仕かけられる方も、いちばんひどい目にあって苦しむのは一般の住民で、あってはならない悲しいことであると思う。

この命のあるかぎり

堺市 船附 孝子

父が元朝鮮総督府へ務めていたため、私の生まれ故郷は、京城（ソウル）。戦後、父が残務整理のため一緒に帰れないので、長女の私は母を手伝って、幼い妹弟と、父母の故郷・山口県へ引揚げて来ました。

貨物列車で京城を出発し、山口県の仙崎港へ上陸するまで一週間かかりました。その間、お寺へ泊ったり、ブサン（釜山）の岸壁で夜明ししたり、襲撃があるとの知らせで女・子供が一家所に集められ息をひそめたり、といういろいろなことがありましたが、最大限の荷物を作って背負って、両手に持っていると荷物が歩いている状態で母のふるさとへ帰り着いた時は、本当にホッとしました。

終戦直後、軍関係や警察関係、役人の上部の人たちは、いち早く飛行機で内地へ帰国し、一般人は取り残されて、それぞれ苦労して帰国したのです。後から聞いた話ですが、私の友だち一家も、船をチャーターし

みんな同じ人間同士、色々と意見を出して、みんなが幸せに生涯を送れるような社会に一日も早くなって欲しいものだ。いまだに、この世界のどこかで、命をかけさせられて傷つき、死んでいく人たちのあることを思うと、きびしい戦火の中で暮らしてきた者として、世の為政者に訴えたい。戦争はイヤダ！と、大きな声をあげよう！

て家財一切と家族が乗ったまま、途中で船が沈んでしまつて全員亡くなったとのことでした。

それでも、私たちは京城からですので、三十八度線以北の方々の御苦労にくらべると、苦しかったなどとはとても言えません。

戦争中は、食糧難、空襲、と内地の方々も大変でした。戦争なんて一部の政治家、軍国主義者の野望を満足させるもの。憲法九条を守って、再び悲惨な世の中にならないよう、私たち一人ひとりが強く意志表示してゆかなくてはならないと思います。

現在でも、世界のあちこちで紛争があり、子どもや女性や老人が戦闘に巻き込まれ、犠牲になっています。少しでも戦争を体験した私たちは、戦争のおろかさや伝え、再び「靖国の英霊」が増えないように、私たちは命のある限り努力してゆかねばと思います。

女・子どもを再び悲しませてはならぬ

綾部市 村岡 敬公

私は先の大戦では正規の海軍士官でした。尽忠報国の熱血に燃え、純真で気鋭に満ちた青年士官でした。

けれども私は、戦争に負けてよかったと思っています。もし戦争に勝っていたならば、今の日本にこのよ

戦争と教科書

1933年（昭和8）
尋常小学修身書 巻一
児童用



1931年に「満州事変」が勃発、以後15年間、戦争は続く。1935年には「……国運ノ隆昌ヲ致スハ……小学校教育ニアリ……」とする「小学教員ヘノ勅語」が発令される。

うな自由と平和はなかっただろうと思います。しかしながらこの自由と平和のためには、私たちは余りにも多くの犠牲を払われ、余りにも多くの破壊を伴いました。特に弱い女・子どもには大変悲しくつらい思いをさせました。

私はいずみ生協からいただいた『私の戦争体験』第十八集から第二十一集の体験手記を全部読ませてもらいました。空襲で、焼夷弾の火の海の中を逃げまどった幼い姉妹、いつも空腹で淋しさに耐えていた疎開の児童、戦争を知らない人たちにはなかなかわからないかも知れないけれど、あれはみな本当のことだったのです。

私は長男だったのですが、男子は軍人になることが名誉の時代だったので、海軍の軍人になりました。戦争末期、母は亡くなっていて、私の家は父と祖母、姉妹四人の六人家族でした。しかし、やがて、父は徴用で九州の炭鉱へ、次の弟は海軍の予科練に入り、その次は軍需工場に徴用でと、家には年老いた祖母と十二歳の弟、九歳の妹の三人だけになりました。家は自転車屋だったので、祖母と姉妹では家業も出来ず、物も食糧もろくにないのにどうしているだろうか、どんなに淋しく心細い思いをしていることだろうか、気が気でなかったけれど、どうしてやることも出来ませんでした。今でもその時のことを思い出すと、夜など目が覚めて胸を締めつけられ、居ても立ってもいられない気持ちになります。

私が千葉県の海軍航空隊にいた時、新しく召集されて入って来た兵隊たちは、もうずいぶん年輩で、聞いてみると「私は村会議員をしていました」とか、「私は郵便局長をしていました」とか、激しい軍務には耐えられないような人たちでした。ちょうど私の父が徴用で家にいなくなったように、この人たちの家庭も女・子どもだけになっていたのでした。当時、我が国の家庭の多くはこのような状態だったのです。

戦争が終って私たち若い士官は海外からの引き揚げ輸送に従事しました。まず始めに、何はともあれ海外の婦女子の引揚げをということで、フィリピンのミン

ダナオ島に向かいました。海防艦という小さな船でした。着いたところは港でなく広い砂浜で、沖にいかりをおろして米軍の収容所から送られて来るのを待ちました。

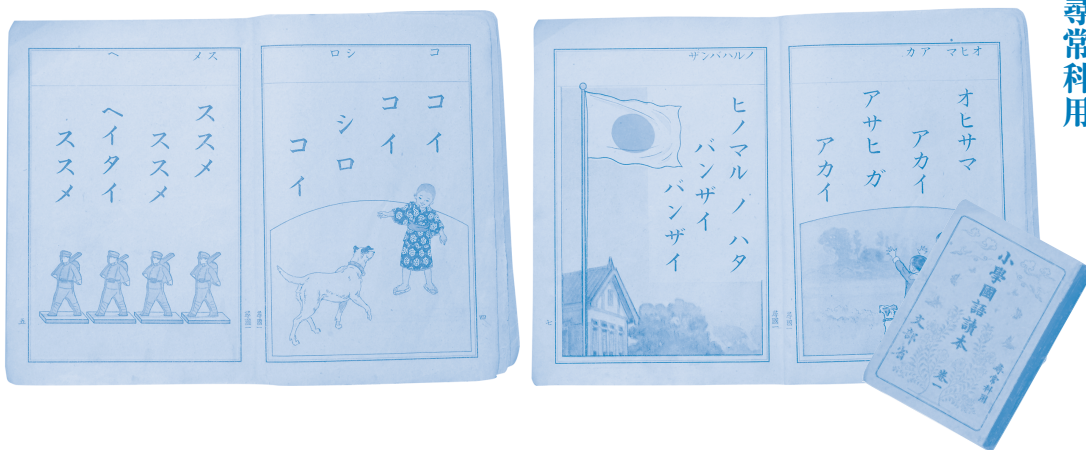
フィリピンのミンダナオ島には、戦前から多くの日本人が住んでいて、マニラ麻の栽培をしておりました。その人たちを早く収容しようというのです。やがて米軍の水陸両用車で送られて来た人たちを見て驚きました。女の人はやせ細って顔は土気色。もちろん髪はぼさぼさで唇に色はない。眼はうつろで表情がない。やっと日本からの迎えの船に乗れたのだから嬉しいだろうに声も出ない。その有様は戦後日本でも見られた浮浪者の比ではないのです。

それよりもっと驚いたのは子どもたちでした。今にも折れそうに細い手足、関節だけが目立って大きい。不つりあいに大きく見える頭、ギョロリと大きな目。今日、テレビでアフリカの飢饉に陥っているかわいそうな子どもたちを見ますが、その時私が見たのはよその国の話ではありません。私たちの同胞だったのです。彼等は上陸して来た米軍に追われ、着のみのままに山に逃げこみました。土地の人に見つかっても危いので、奥へ奥へと逃げ隠れたそうです。もちろん食べる物とてないが、それより困ったのは塩分だったそうです。夜ひそかに山を下って海岸に塩気を求めに行った人は、たいいてい帰って来なかったそうです。

私は、始めから軍人になったものではありません。生物学の勉強をしたかったのです。しかし戦争がそれを許しませんでした。戦争は人の一生を狂わせます。国を誤り、人々を正常な状態でなくします。今の子どもたちはテレビゲームで簡単に銃を打ち、人を殺しますが、戦争はそんな格好のよいものではありません。戦後勤めた会社で、「人をだましてはいけないが、人からだまされない知恵を持たねばならぬ」と教えられました。私はこれを「他を侵してはならないが、他から侵されない力を持たねばならぬ」と言いかえたいと思います。

私たちは戦争の愚を再び繰り返してはなりません。

1939年(昭和14) 小学国語読本 巻一 尋常科用



1940年、ノモンハン(ノモンハン)の戦いで死者・行方不明者が80%におよぶという大敗北。しかし国民にその実相は知らされず、翌年には日独伊三国軍事同盟が結ばれる。

私たちの子や孫に再びあのような苦しみを味わせてはなりません。そのために自分の国は自分で守らなければならぬのではないのでしょうか。スイスの軍事力は小さなものでしょうが、しかしスイスの国民には自分たちの国土は、民族は、自分たちで守るといううんとした気概と誇りを感じます。

神戸大空襲

神戸市 竹下貴美子

昭和二十年三月十七日、その時私は兵庫に住んでいた。十六日の夜中より空襲がひどくなり、私六歳、弟三歳、祖母と三人。その夜父は宿直、母は家を守り、危なくなれば二駅ほど離れた父の所に来るようにと言っていた。家を出たすぐ警防団の人に止められ「そんな所へ行くことはならん」としかられ、近くの防空壕に入る。空は夕焼のように赤く、火の粉は飛び、祖母に手を引かれ壕に入る。「どなたかおられますか」誰も返事がない。しばらくいたがまわりに火がせまり、こんな所にいたら死ぬと近くの学校へ避難する。父は待てど来ぬ私たちを心配し、落ち着かぬ時間が過ぎ、家を守っていた母も家に火がまわり、布団をかぶり、火の中を父の所まで行く。近所の人の話ではそれくらいの年の人が死んでいたと聞かされ、もう駄目かと思いつながら学校に着き、私たちの元気な姿に安堵したこと。焼跡を歩き我が家に着くと跡形もなく、水道管の水が音をたてて出ていた。焼死した人が何人か片腕を曲げ、黒こげになり転がっていた。今もはっきりと覚えている。

一夜にして学校以外の建物は跡形もなく消え、まわりは焦げ臭い匂いだけが鼻をつく。食べる物はなく、近くで雑炊の配給があると聞けば私も頭数に入り、鍋を持たされた。まんの悪い時は目の前でなくなり、お腹のすいた私は泣いていた。皆焼けてしまい、昨日までの生活が一変した。それからというのは皆配給制度

今日、我が国では、自衛隊を白い目で見たり、また、自衛隊自身遠慮の風があります。かつてのような軍の横暴は厳に戒めなければなりません。私たちは自衛隊に対する認識を改め、国民から信頼され敬愛される自衛隊といわれるような自衛隊を、国民として育んでいかなければならないのではないのでしょうか。

になり、パン一つも切符がないと買えない状態。靴はゴム靴、サイズ等は関係なし、当てるだけ良い方。それから後も焼夷弾の落ちて来る中を逃げる日が続いた。父の知人に部屋を借りての生活が始まった。夜は電気に布をかけ、光が外にもれないようにと静かに夜を過ごした。どこからか父がドラム缶を持って来て風呂を沸かしてくれた。小さな私は入るのがこわくサビ臭い風呂になかなか入れなかった。祖母も暇を見つけて畑で野菜を作ってくれた。甘い物に飢えていた私たちは今でいうザラメの砂糖が何よりのおやつ。紙の中に入れてもらい食べた。現在では考えられない。

芋の収穫時は大変うれしい。御飯の中に芋を入れかさを増す。最高においしかった。御飯の量を増やすのに豆かすと云って大豆をベシヤンコにしたものが三割くらい入り、口の中がゴシヤゴシヤになり食べられなかった。祖母はかわいそうにと云ってより出して食べさせてくれたが、父はすぐ怒り、取りあげられてしまった。芋を蒸して干すのが私の仕事となった。何カ月か過ぎた頃に社宅に住めるようになった。阪神の打出に引越した。また夜中に空襲にあい、道が油で燃える中を海に逃げた。爆弾の落ちて来る時は必ず黒い雨が降って来る。またしても家が丸焼け。

やがて八月十五日、終戦の日。近所の人たちは、ラジオ放送を聞いて泣いていた。母が「これで戦争が終った」と言っていた。その年の十月に父は病気で亡く

戦争と教科書

1941年(昭和16)
ヨミカタ



「桃太郎」の話はよく教科書に出てきているが、前のものと比較すると鬼の顔が当時のアメリカ大統領・ルーズベルトの顔に変わっている。1941年、「国民学校令」により小学校は廃止される。

なった。

母は二人の子どもと祖母との生活のため朝早くから働きに出るようになった。皆を不幸にする戦争はあつ

てはならない。戦争によって大切なものを多く失った。こんな悲惨な戦争が地球上からなくなる日が一日でも多く続く事を祈る思いです。

青春時代「四方山話（よもやまばなし）」

堺市 戸田 昇

氏名 戸田昇 昭和三年十一月十二日生、七十二歳
職業 戸田超耐火物(株)社長 現住所 堺市
略歴

昭和二十年三月 十七歳 戦争末期の混乱のなか旧制
中学校を四年卒業（この時四年、五年同時卒業）
旧制高校理科受験失敗 四月 旧制福知山工業専
門学校化学工業科入学 理工系へ入学しないと強
制的に工場作業に徴用された 八月 終戦

昭和二十一年一月 十八歳 工専からでも大学受験出
来るようになりそのため福知山工専に在籍、本格
的に授業再開、福知山市内に下宿

昭和二十三年三月 二十歳 卒業

昭和二十四年四月 二十一歳 一浪した後京大理学部

（旧制）入学 京都に下宿

昭和二十七年三月 二十四歳 卒業と同時に大学院入
学 この頃になると砂糖の統制が解除され、お菓
子が自由に買えるようになり世の中が大分落着い
て来た

昭和二十一年（昭和二十三年）十八（二十）歳

日本が経済的に最も疲弊していた時期で、食べもの
はもちろん着るもの、その他生活用品のすべてが不足
していた。従って一部の悪徳商人や悪徳役人を除いた
大部分の人々はすべての点で我慢の生活を強いられた
時代で、この時に青春真っ盛りを過ごしたことは今に
なっていると思えば、かえって幸福だったかも知れない。小
学校から大学までの同窓会に他の行事を少々犠牲にし
ても必ず出席し、しかも盛り上るのは工専の同窓会で
ある。

四方山話（よもやまばなし）

1、友だちと道や学校で出会った時の挨拶

腹へったなあ何か食いもんじゃないか？ お互い腹へっ
たなあ！ 田舎から来ている連中は時々家に帰ると両
手にいっぱい食糧を持って帰ってくるので、都会か
ら来ている連中がお相伴にあずかる図式が出来上って
おり、腹がへっても結構楽しく勉強していた。

2、ぜんざい宴会

砂糖（貴重品）が手に入ったので、ぜんざい食う会
をやるから集まれと十二人集まって、一人の枕の
小豆を取り出し、水で何回も洗って、見たところ綺麗に
したあと砂糖を加えて良く煮たうえで「さあ食べよ
う」と口をつけたけれどもあぶら臭くてどうしても食
う事ができず、空腹をかかえて泣くに泣けない笑い
話。

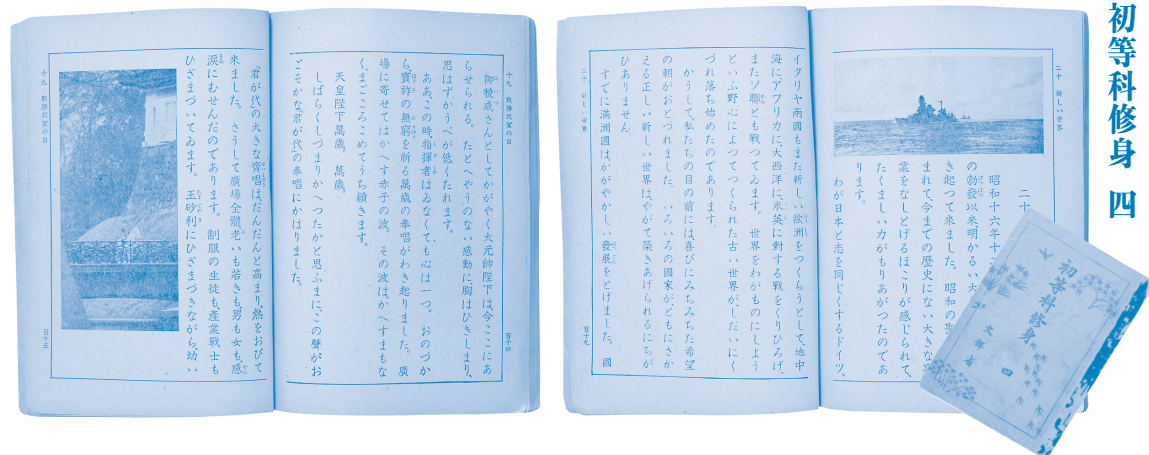
3、松茸と芋（さつまいも）の話

八百屋で芋を売っているとの話で、三十円とバケツ
を持って買いに行ったところ、芋はバケツすれすれ一
杯で三十円、見事な松茸は山盛り一杯で三十円だった
ため、松茸を買って帰り、待っている連中に馬鹿にさ
れながら塩をふり、七輪で焼いて食べたけれども、現
在ほどおいしいとは思わなかった。「なんで芋買うて
来えへんかったんや」「こんなもん腹の足しにならへ
んで、すぐ腹すくで！」と今なら最高級の松茸もかた
なしの笑い話。

4、冬の話

福知山はめちゃくちゃ寒い所で、よく雪が十五（二
十）センチ積もった。学生はふとんの中でうつぶせになっ

1943年（昭和18）
初等科修身 四



勉強するか、股火鉢をして背中から毛布またはふとんをかぶり、必死になって勉強したけれども、後になってみると腹が空いた状態で、しかも寒い時の方が良く頭に入り、応用も出来たように思われる。

雪の中を歩いて学校まで十分前後かかるため、その間に靴も下駄もびしょびしょになり（当時、長靴はもちろん靴もあり良いものはなかった）、下宿に帰った頃にはしもやけ、あかぎれなど足先がひどい状態になるため、豆炭を入れた置きごたつに張り付いて暖を取った。豆炭を買うお金を切らした時は友達の家へ二

旧海軍軍港で迎えた終戦

堺市 永野 京子

終戦を国民学校二年生で迎え、旧海軍軍港でもあった街。舞鶴に生まれ育った私の、戦後のお話を少しさせていたきたいと思えます。身体が弱く学校を休みがちだった私は、玉音放送の記憶もほとんどなく、戦後の食糧難の毎日之余儀なくさせられた中で、親たちの懸命の庇護の元に空腹を抱えて育った一人です。

そんな私に今でも忘れられない記憶、それは当時引揚船（復員船とも）と呼ばれた釜山・大連や旧ソ連からの邦人や旧日本兵の方々の帰国風景です。舞鶴は鎮守府が置かれた軍港であったため、舞鶴地方引揚援護局という国の機関として、戦後処理、とくに外地からの引揚者の帰国を迎えるという大きな任務を帯びる自治体でした。他県に上陸された方も大勢おられた当時、一般邦人を含め、舞鶴は興安丸（また旧日本兵の方々が乗船）や病院船の高砂丸（御遺骨を含む傷病兵の方々）などのベ三百以上の船が旧ソ連と舞鶴を往復しておりました。

終戦直後に始まったこの引揚者数は六十六万人と聞かれています。入港が有名になり、以後多くの御家族が日本各地より長時間乗り継いで舞鶴へ出迎えに来られたのもこの頃でした。入港の間隔が次第に遠のいて

三日居候をしたりしていた。

5、窮すれば通ずる話

お金のない人、食べもののない人、着るもののない人など学生には色々あったけれども餓死、凍死等なくお互い上手く融通し合って貧乏乍らそれぞれ青春を楽しんでた。

今の世の中で年何万人かの人が自殺しているけれどもいつの世も同じことが言えるので、よく考えてさげば必ず通ずる道が見つかるものと思われる。以上。

いく中で、約十三年は続いたででしょうか。

『岸壁の母』や『リングの唄』などが戦後を象徴する代名詞となったのは皆様よく御存知のことと思います。怖かった戦争が終り、嬉しかった私たちが三、四年生の頃、無事帰還の兵隊さんたちをお迎えする地元の小学生として駅前に並び「お帰りなさい、御苦労さまでした」と子どもながらも日の丸の小旗を一生懸命振った姿は、兵隊さんと共に今もはっきり覚えています。現在皇室の方をお迎えする光景での無邪気な園児たちや沿道から振られる日の丸の旗と、遠い昔の私たちのそれは共に同じ日の丸です。

紆余曲折の戦後の我が国の復興、その流れを思う時、何という大きな違いでしょうか。平和の有難さ、尊さ、大切さは痛感の極みといえるでしょう。

戦争も時代の流れと共にとかく風化が懸念されている昨今、かつて沖繩、長崎に転勤で暮らした者として、舞鶴生まれの私さえ想像以上の知らなかったことが余りにも多いことに驚きました。過去の歴史を風化させないためにも、もっともっと世に訴えるべき（特に沖繩）だと身をもって実感いたしました。

平和への祈り、願いを指す姿勢、個々の力は小さ

戦争と教科書

外国（占領地など）で使われた教科書



右は占領下の朝鮮で使われていた教科書。左は中国東北部（旧満州）で使われていた教科書

くとも、益々のそんな広がりをお願いでいっばいです。

虱(しらみ)

寝屋川市 山根 健三

昨年の夏も、私は通天閣にて、恒例の「平和のための戦争展」を見学し、いまた懲りることなく国家間の憎悪をあり、戦争という破壊消耗によって不況を打開すべく憲法を改正し、米国のいうがままに、「靖国の英霊」をつくり出そうとしている今のお上に激しい憤りを覚え、また大戦中に多大のご迷惑をおかけした近隣諸国の方々に心からのお詫びを申し上げながら、改めて「我に生ある限り、お上にはお手向ひ奉る」の決意を新たに、天王寺駅に向かうべく、帰路につきました。

途中、動物園の南側の遊歩道を歩きましたが、道の片側の冊の中は、野宿者の方たちの青いテントの仮宿舍がえんえんと阿倍野橋の近くまで並んでおりました。その前をしばらく歩いて行くと、七月の炎天下、焼けつくような路上に座り込んだ初老の方が、上半身裸で、ご自分の肌着の上をうごめいている小さな何かに、真剣な眼差しで狙いを定めては芝生の方へピュッピュッと弾きとばしておられるお姿が見えました。

私の家は戦前、大阪市西区の堀江にありましたが、空襲で家財を失くし、その後、父の仕事の都合で家族ともども中国東北部に移り住み、敗戦でホームレスどころか、一夜にして国家が崩壊して棄民となり、生命も財産も保証されない事態となる国家レスをも体験させられた私には、その小さなものが何であるのか、すぐに悟ることが出来ました。そしてしばらくは、遠い昔の友に出逢ったような懐かしい気持ちで眺めておりました。しかし、体は心とは裏腹に、ちよっとでも早くその不衛生な場所から逃げ去るべく、もと来た道を足早に駆けだしております。頭の中では、この方た

黙祷の サイレン重し 原爆忌

ちも好き好んで野宿をされているのではない、お上の大企業本位の貧しい政治の犠牲者なのだ、自分と同じ労働者であり、仲間なのだーと理解しておりながらも、そして、今もしこのテントの中に、失職のため食事も満足に摂れず、栄養失調ゆえに身動き出来ぬ方がおられたら、私はそのお方をためらわずに我が家にお連れして、介護してさしあげる人間味のある行動がとれるだろうか？ と自問自答しつつ、歩きながら敗戦の年のことを想い出しております。

当時、父は赤軍と開戦の前日、軍隊に召集され不在、家には祖父と母、それに十五歳の私を頭に、三人の弟と満一歳になったばかりの妹がおりましたが、敗戦の混乱と、中国人民の方々のかつての侵略者である私ども日本人に対するすさまじいまでの怨讐の衝撃と恐怖、さらには食料難による飢餓と栄養失調で、まず妹と祖父が死亡し、その後母も「もう戦争は終り、軍隊も解散したやろから、お父さんは必ずや先に大阪に帰っているはずや。長男のお前は責任をもって弟たちを大阪に連れて帰るように」と言い残して三十九歳の命を閉じました。

北辺の国の冬の到来は早く、暖房のない難民收容所は室内でも氷点下。私たち兄弟は、まだ敗戦時のままの夏服でした。五歳の末弟の両足は凍傷で柘榴(ざくろ)の实のように裂けて血が流れ、痛みで立つことも歩くことも出来ませんでした。毎日の食事は、一日一度赤軍より配給される脱穀していない硬く赤い馬糧の高梁のご飯のみ。寒さと飢餓による体の衰弱で万年消化不良となり、食べたしりから下痢を繰り返すひどい有様でした。常に氷点下の気温の中、その下痢さえも歩きたび

外国では今、戦争をどう伝えているか？



右は中国の中学校の教科書より。いずれも南京で「中国青年を銃剣刺殺用的にする日本軍」「人を切り殺したあと、軍刀の血糊を拭き取っている日本兵」とある。左は韓国の小学校の教科書より。

にほんの一瞬シュッと出て、ズボンの中をスーッと足もとに流れる、温かいものが快く感じる毎日でした。このような状況下、末弟を凍餓死から救うために、やむなく中国の方に養育を依頼しました。戦後、中国の大学を卒業し、国営工場の技師として勤めていたこの末弟を探し出し、再会するのに四十五年の歳月を要しました。以前中国に住んでいたこの弟家族と文通をしていた頃、私は甥から「伯父さん、なんでうちには、中国に親戚があるの？」と尋ねられました。私は過去の歴史の真実と事実を正しく教えられていない甥のこの素朴な疑問を、今そのままお上のお偉方にお尋ねしたいと思います。「ナンデヤネン」と。

その後も私たち兄弟の収容所生活は続きましたが、総領の甚六として育った私は身体が弱く、十二月の末に極度の空腹と栄養失調と極寒のもと、意識が朦朧となり、夢遊病者のような状態で、母の遺言も、弟たちを保護せねばならぬ責任があることも忘れて、無意識に収容所を出て氷点下三十度の雪の降る夜道を徘徊、とある中国人の飯店の前で行き倒れ、お店の人に発見された時は、体の上に雪は降りしきり、人が寝ている形をした小さな山のように私を包んでいたそうです。

その時の私の格好は、下着も夏服もボロボロで、防寒のために拾って来た大豆などの穀物を入れる麻袋を頭、体、脚、足に巻きつけ、髪は伸び放題、手足の指の股は栄養失調のため皮癬^{ひせん}となって深く裂け、血が滲み、骨と皮ばかりで、垢と埃で黒光りした身体も、纏っていた衣服も、霜振り模様に見える程に頭がわき、体中を這いまわっておりました。翌日、私が意識をとり戻した時は、このお店の屋内で暖かい石炭炉そばに寝かしていただいております。その後半年間、このお店の方の「恨には徳を以て報いる」という中国の古い諺^{ことわざ}どおりの寛大な心で、家族同様にお世話していただき、九死に一生を得、お陰様で昨年は古稀を迎えることが出来ました。

想えば学校で、「天皇のため国のためには己の命を捧げよ」と教育され、それを忠実に実践してきた私たちが極限状態の中で苦んでいた時、神様のはずの天皇

様も、国も、軍隊も私たちを護り救っては下さいませんでした。当時、男子の私でさえこの有様です。まして保護者を失くした幼児、それにご婦人の方たちは、どんなにつらいお気持ちで必死に生きてこられたのか、想像を絶するものであったことを知ってあげて下さい。

我が家の戦後処理には五十年かかりました。多くの人の血と涙を流して得た平和。それが今また、日米のブルジョアの企みによってたったの半世紀で崩されようとしている悔しさと情なさ、あの悲惨な戦争をこんなにも簡単に忘れてもええんやろか？

私には可愛い孫娘がおります。この孫娘を見るたびに戦争ゆえに母乳すら満足に与えられず、餓死した妹を想い出し、男の子ばかりの我が家に、初めての女の子の出生を心から喜んでいたら有りし日の父母の笑顔を、昨日のように想い出します。人殺しのための軍事教練とビンタに明け暮れた学生時代。空腹をかえ何ひとつ食べたいものがなかった青春時代。いったい私たちは何の咎^{とが}で、こんな目に遇わねばならないのでしょうか。今、それを想い起す時、戦争の恐ろしさ、無意味さ、その傷跡の深さを忘れてはならないと思います。「前事不忘、後事之師」——過去のことを忘れることなく、これを将来の教訓とするこの言葉を肝に銘じ、この夏の参議院選挙では日本が世界に誇れる平和憲法を守り抜く覚悟を態度で示そうではありませんか。ありがとうございます。生協の皆様のご多幸をお祈り申し上げます。



戦争と教科書

現在使われている教科書と「新しい教科書をつくる会」の教科書(市販本)



現在使われている教科書(中学社会)には「日本の東南アジア侵略」として「虐殺」「収奪」などの記述があるが、「つくる会」の方にはそれらの記述はなく、かわりに「大東亜」「快進撃」「勇敢」などと表現。